

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 クルディ ケイコ  
COURDY KEIKO

本論文は、現代日本の舞台芸術において見出された身体表現の新しい傾向を調査・分析することを通じて、高度で強力なメディア・テクノロジーが文化装置として登場してきている現代の芸術創造の普遍的な徴候を見出し、それを解読しようとする、言わば「文化徴候学」とでも言うべき研究の成果である。対象となっているフィールドは、80年代から90年代にかけての日本の舞台芸術であるが、その無数の作品制作のなかから、論文提出者は、正反対とも言うべき傾向を見せる二つの制作集団、ダムタイプとパパ・タラフマラに注目し、それらのグループの制作現場に赴いて関係者にインタビューするなどのフィールド・ワークを行い、そこで得られた資料から出発して、それぞれの芸術の現場における「身体のヴィジョン」を、身体に関わる同時代の哲学、美術、建築、批評などの多様な言説との突き合わせを通じて分析・解釈しようとした。また、80年代から90年代における身体表現の位相をより明確に提示するために、それを、50年代から60年代における——とりわけ「肉体」という言葉のもとに志向されていた——身体表現のあり方によって、逆照射することも行われている。

すなわち、本論文は、土方巽の「暗黒舞踏」に見られるみずからのうちに根源的な原始性を見出す暴力的で、性的で、土着的な「肉体」の表現の位相を定式化した比較的長い序文からはじまり、ついで本論である、高度なテクノロジー環境のもとでの新しい身体の位相を、機械的なシステムと不器用な身体とのインターフェイスから生まれる社会性の神話として表現したダムタイプの作品創造の分析（第1部）と、反対に、身体と空間、主体と客体とがゆるやかに融合する「共生」の場を舞台上に生み出したパパ・タラフマラの作品創造の分析（第2部）、最後に、それら相反する身体の位相を結ぶ軸のうちに、現代におけるヴァーチャルな知覚と身体の新しい可能性の展望を概括する結論部から構成されている。

審査は、本論文がまだほとんど研究がなされていない創造集団について、インタビューなど今後の研究の基礎となるべき重要な資料から出発して分析と記述が行われた批評的労作であり、ダムタイプにおけるヴァーチャルな身体イメージと社会性についての繊細な解析やパパ・タラフマラにおける複数的で緩やかな時間構成に関するオリジナルな解釈など見るべき創見が随所に見られることなどを高く評価したが、同時に、論文提出者が方法論的な枠として設定した60年代の「肉体」の分析記述の機能がはたしてうまく機能しているかどうかが問題となり、その点に集中して議論が行われた。

とりわけ、60年代的な身体がほとんど土方巽ひとりの特権的な肉体によって集約されていることは、方法論的に一定の図式化が必要であるとはいえ、少々性急な解釈に終わっていないかという留保が一部の審査員から提起された。また、論文提出者自身がフィールド・ワークを行うことができなかったこの60年代の舞台芸術の二、三の事実に関しては、審査のなかで、その時代をよく知る審査員の一部から補足的な説明がもたらされた。また、本論文はフランス語で書かれているために、インタビューの引用などがすべてフランス語へ翻訳されているが、それについても日本語による原文資料が付加されていれば、この論文の価値はもっと高まったであろうとの意見も表明された。

以上、審査員は、この論文が公刊される場合には、論文中の若干の記述について軽微の修整をほどこすことが望まれるとしたが、しかしそのような瑕疵はあるものの、フランス人研究者による日本の現代舞台芸術の現場でのフィールド・ワークを踏まえた本論文は、海外も含めた今後の研究者に新しい研究フィールドを開くものであり、調査・分析・解釈にわたってその業績は大きいと認めることができる。

以上の審査により、本審査委員会は、ケイコ クルディ氏が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。